

頼りになる者

「一。不法の人は仏法を違例にする、と仰せられ候。仏法の御讃嘆あれば、あら氣詰りや疾く果てよかし、と思うは違例にするにはなきか、と仰せられ候ふと云々。」(御一代聞書)

蓮如上人の仰言である。無信心の人は、仏法のことを違例、平常不断の事としなくて、特別違つたこととすることである。だから、仏法御讃嘆の席がはじまると、あらきづまりや、早く果てればいいのにと思うとの仰せである。み法の席を嫌う者は、もちろん念仏の人をも好かないで遠ざかる。

世間五欲の生活が普通であつて、仏法は特別のことである。念仏は非常であつて、何か違つたことであり、世間のあつてもなくてもいいことが通常事であるとの考えは、だいぶ法を求めた人でもその通りではないか。

念仏生活は非常ではない。念仏生活こそが何人も成就し生活しなければならぬ平常不断、平凡なる道である。よそ行きの相ではなくて、平常服ふだんぎである。

忠義も、孝行も平常服であつて、よそ行きの晴れ着ではない。念仏行者はかく信ずる。

真の闇には何も見えない。しかし曙の光が闇を破りはじめて、この世の相が見えはじめた時、それは決して、特に造られた非常事ではなくて、あるがまゝの平常事である。

念仏の世界は如来廻向の智慧の世界である。恵まれたる信心の智慧によつて見えはじめた来たところの、我、人、世間の真相は、あるがまゝの真相であるが故に、再び變つて来るものではない。

そこで、信心の人は信心の人の尊さを知る。

人の智慧、内に開いて来る世界は、その受けた教えの深さに比例する。深い教えは、深い智慧から生れるが故に、その教えを聞く人もまた、深い智慧の世界に帰入せしめられる。大無量寿経は、覚者たる世尊の説かざるを得ずして説きたまえる経である。したがつて聞くものをして覚さますさずにはおかないのである。

証書を入れておいてもあてにはならぬ。印を捺しておいても、証人を立て、おいても、ほんとうにあてにはならない、門徒というも力にはならない。

しかし教えによつて真実開いた心だけは、ついに何によつても、もとにかえすことは出来ない。真の力になるものは、ただ、教えによつて迷妄を破られ、そこに開いた信心だけである。千里の遠きにあろうとも、同胞はついに同胞である。

「一。同仰せられ候。世間にて時宜しかるべきは善き人なりと雖も、信なくば心をおくべきなり。便にもならぬなり。たとえ片目つぶれ腰をひき候ふようなる者なりとも、信心あらん人をば頼もしく思うべきなりと仰せられ候。」

まことに蓮如上人のうがったみ教である。「世間にて時宜しかるべきは善き人なりと雖も、信なくば心をおくべきなり、便にもならぬなり」とは、世間では、才能があつて時にかない、所に適当してなかなかはたらきのある善い人でも、信心なき人には、最後まで心を許すことは出来ない、心をおくべきである、真に便になるものではない、と仰せられるのである。その通りである。時にあたって宜しく善処する才子、決して心を許すことは出来ない。しかし「たとえ、片目つぶれ腰をひき候ふようなる者なりとも、信心あらん人をば頼もしく思うべきなり」と、まことに私の過古の念仏生活の経険は、このことの真実であることを知らして下さった。

信心の人は、如来の真実に眼を開かれた人であり、真実を生命とする人であり、自己の真相を知つて廻心懺悔せる人であり、一道を歩む人なるが故に、頼みになるのである。道を平常となし、仏法を違例とせぬ人であるが故である。

大聖は、世の中のかくある当然の相を、そのままの相に知り、そのまま受け取り、その中に深いものを見出して大聖となられたのであり、凡夫は、盲であるが故に、平凡にして当然の相すらこれを受け取らず、これを捨て、これを見ず、あるいはこれを避けんとして、ついに何ものをも得ずして、この世を去るものである。

2

生れたものは死し、会うた者は必ず別れる。それは、悲しくとも、辛くともどうすることも出来ぬ大地の実相である。結核の第三期となり、胃癌の重症となる、そうした時、どんなに絶望の重患であろうとも、それを何とかして逃れ救われようとしてもがく。そこにあさましい迷信祈祷の世界が最後までまつわりついて、しかも助からないうで死んでゆく。

死にゆく自分を自分として受け取つてゆく所には、深い智慧が生れて来る。しかもそれは、大法を聞き、念仏に乗托しないでは不可能であろう。

子供はすでに五人ある。結婚して十五年、どれだけ夫の欠点をつき、その不甲斐なさをせめ、夫婦間の冷たさを言いまわつても、如何とも出来ないことである。今さら夫の改造も出来ず、五人の子供をおいて帰られたものでもない。一度はつきりその夫を受け取つたがいい。念仏合掌の心が生れ、その心で夫に向うことが出来た時、必ず夫のいい所が現われて来て、新しい世界が開いて来るであろう。夫婦間を冷たくしていたのは貴女であるとわかつて来るであろう。私はそうして更生した夫婦をあまりに多く知つている。

貴女の高慢一つが見えないのである。本仏のみに、貴女の胸のどん底に巣くつてゐる邪見傲慢の癌を投げ出すべきである。そしてその下つた頭を以て、親にわび、夫にわび、子供にあやまるがいい。

猫は西陣織の上に泥足で上つていても何とも思はない。凡夫は、どんな恩徳の中に包まれていても、なおそれに足らずして他のものを求めて走る。宝玉の如き尊きものも、西陣織を敷きつめたような世界をもすてて、小さきものを追うて逃げてゆく、猫が鯛を追うて走るように。だからこそ、信なきものは何を求めていつ走り去るやらわからぬが故に、頼りにならぬのである。

如何に尊い世界に出あい、尊いことを聞いても平気であるものは、同時に如何に恐るべき世界に足を入れても平気である者である。炎々たる炎の上で踊つていてもそれを知らない。

彼は時に善友と悪友、善知識と悪知識のみわけがつかない。時にその御機嫌をそこなえば、明智光秀の二の舞さえ演じて平気である。だから唯一絶対の如来に、真に眼の開けない者は、頼りにはならない。才子であればあるだけ、あてにはならない。

五欲煩惱だけで生きている者は、必ず己の五欲煩惱を満足させてくれる者を以て、頼りとし、力とする。その欠点短所不徳を責め、苦き良薬をくれる者よりも、名利を満足させてくれる者が頼りになる人と見える。そこで教えよりも、権力者の子分となつて、己の名利欲を満足しようとする。

あるいは又、己の名利欲の為に多くの人を犠牲にして平気となる。
かゝる人には永遠の光の道はとぎされてある。

寺の院主が、門徒総代や、門徒の御機嫌をとる。やれお茶だ、酒だと、ただこれ御機嫌をとる。何の為にそうするのだ。やがて、手に追えない門徒総代が出来る。何年たつても、真に力になつてくれる人は一人もいない。威張る為の門徒総代、子孫に総代をしたことがあると名を残したい為の門徒総代、ついに一人の念仏行者は生れないで、やがて寺を縛るやつかいな足手まといとなる。何に頼るべきであるかを知らなかつた者の当然の成り行きである。

酒を飯みたい為に集つたものは力ではない。名利心で集つた者も力ではない。愛によつて集つたものも力ではない。御褒美目当てに集つたものも力ではない。どんなに今仲がよくても、永遠の力ではない。ただ、同一眞実教によつて、同一念仏の世界に生かされる信の人のみが力である。

「その寵を水につけよ。我が身をば法にひてて置くべきよし仰せられ候ふ由に候。寓事信なきによりて悪きなり、善知識のわるきと仰せらるゝは信の無きことをくせごとと仰せられ候ふ事に候。」

信のないのがいけない。ただ、信のないのがいけない。ついに信のないのが悪い。信がなければその生命とするところは五欲である。

如何に破れ籠の如き身であろうとも、愚かであろうとも、無力であろうとも、その身を大法にひてる、大法の水に五蘊ごおん仮和合のこの身をつけて生きさせて頂く、そこに、仏凡一体の信の世界が開ける。

ああ、幸なる哉、我はこの世に生れてかかる永遠の善友を如来によつて与えられた。真に力となつて下さる同胞を恵まれた。だが、我等は甘えてはならない。この同胞と共に、念仏してお浄土まで歩ませて頂く、これにすぎたよろこびはない。私たちの生くべき世界は、明瞭である。

(二月二十八日基隆市寿町三ノ九大島益太郎氏宅にて)